源氏物語

夕顔

松尾聰
黒須重彦 校註

笠間書院刊

昭和五十二年三月三十日　初版発行
昭和六十年四月三十日　四版発行

松尾　聰
昭和六年東京帝国大学文学部国文学科卒業。同九年同大学院修了。現在、学習院大学名誉教授。文学博士。「平安時代物語の研究」（武蔵野書院）「平安時代物語論考」「源氏物語を中心とした『うつくし・おもしろし』攷」（笠間書院）、「全釈源氏物語一～六（桐壺～朝顔）」（筑摩書房）その他若干の著書がある。

黒須重彦
昭和二十八年東京大学文学部中国文学科卒業。現在、大東文化大学文学部教授。「夕顔という女」（笠間書院）、「屈原詩集」（角川書店）「楚辞」（学習研究社）その他若干の著書がある。

校註者の検印省略

源氏物語　夕顔

定価五〇〇円

校註者　松尾　聰
　　黒須重彦

東京都江東区毛利二ノ五ノ七ノ八一三
発行者　池田つや子

東京都江東区亀戸町七ノ四五ノ二
印刷者　山岡景信

東京都千代田区猿楽町二―二―五
発行所　笠間書院
電話東京（二九五）一三三一番
振替口座東京一―五六〇〇二番

1393-953014-0924　科学図書印刷・笠間製本

源氏物語

夕顔

（訂正増補版）

松尾聰
黒須重彦　校註

笠間書院刊

解説

「夕顔」は、三角関係の小説である。

源氏・夕顔・頭中将、この三頂点を結んだ三角形である。ただ、頭中将は、五条なる夕顔の隠れ家の前を行列をなして通るときと、夕顔の死後源氏を見舞うときの二箇所に登場するのみで、表立って出て来ないだけである。が、しかし夕顔の巻における頭中将の存在は大きい。それを、われわれは、永い間ほとんど無視してきた。

この巻の発端は、遠く帚木の巻のいわゆる「雨夜の品定め」にある。この巻を読む者は、「雨夜の品定め」を、まず充分咀嚼しておかなければならない。そこには、いくつかの女性のタイプが創り出されているが、その各〻のタイプはすべて、結局は否定的性格を与えられているように見える。そうして、理想の女性は得られるべくもない、いるとすれば、男性の観念の中にのみあり得るといった結論のようにも見える。しかしなお再度読みとおしてみたとき、作者は頭中将の、あのひかえめな告白を借りて、男性にとっての永遠の女性像を語っている、と筆者には思える。

夕顔の死後一か月余が経過したころ、夕顔の侍女であった右近を召し出して、夕顔についてあれこれと、源氏が問う場面がある。

源氏は、右近の話を聞いて、次のようにいう。

はかなびたるこそはらうたけれ。かしこく人になびかぬ、いと心づきなきわざなり。みづからはかばかしくすくよかならぬ心ならひに、女はただやはらかに、とりはづして人にあざむかれぬべ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

きが、さすがにものづつみし、見む人の心には従はむなむあはれにて、わが心のままにとり直して見むに、なつかしくおぼゆべき。

頼りなさそうな女こそ可愛いものだ、そうして、柔和で、人にもだまされそうな女、また男の心によく従う女こそ愛することができるのだ、というのである。

源氏のこの言を聞いて、右近は、

この方の御好みには、（夕顔は）もて離れたまはざりけり（ぴったりのお方であった）、と思ひたまふるにも、くちをしくはべるわざかな。

と、泣くのである。

もちろん完璧なる女性などあるはずもない。いや、そもそも完璧などという概念では、女をとらえることはむずかしいのであろうが、夕顔という女性が、少くとも源氏の心を捉え若き源氏を燃え上らせたという事実は、だれも否定することはできない。源氏という存在を、これほどまでその根底から揺り動かした女といえば、藤壺を除けば、おそらく他には見当らないであろう。

右に引用した源氏の言および右近の言による夕顔の性格づけは、「雨夜の品定め」における、女性に関する肯定的賛美的評語を丹念に拾っていけば、ほぼ望ましき女性像に近いことが分かるであろう。

そこで、本解説文の初めに提出した「三角関係」という一つの軸と、右に述べたような「夕顔像」という一つの軸とを組み合わせたとき、私たちは、夕顔の巻の冒頭における夕顔の行動をどのように作者が描こうとしていたか、その正しい軌跡を辿ることができるように思われる。

夕顔側は、源氏など知るべくもない。この素朴な事項は、なおざりにはできない。そこに来ている

「忍びの車」。それもこちらに関心を持っている様子（実際には、源氏はあやしき垣根に咲く夕顔の花の風情に心惹かれたのであるが、その方向は、まさしく夕顔に向けられている。しかもほとんど当時としてはあり得なかったであろう、随身を従えたお忍びの車がじっとそこに止まっている）を見て、隠れ住む自分を、頭中将が訪れてくれたのか、と推測し、或は期待した、と考えることは、自然であろう。これを前提としなければ、夕顔という女のとった行為は、あまりにも不可解である。それどころか、当時の社会通念からすれば、社会的制裁を受けて当然の破廉恥的行為であろう。もしこの行為を、何らかの理由を創案（実際いくつかのそれが行われている）して是認したとしよう。するとどういうことになるか。

夕顔は、頭中将との愛の生活、一人の女子までもうけたその美わしき生活を、またその思い出を、忘却してしまったのか、そういう記憶喪失的或は無生活的女性なのであるか。

夕顔の行為を考えるとき、そこに頭中将という三角形の一頂点をおかなければならない。詳細をいまここに述べるわけにはいかないが、右のような条件を前提として、はじめて

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

の歌意は解明可能になるのである。解明可能といったが、実は、この歌は、一種のパスワードなのである。作者自ら源氏の視点において、「そこはかとなく書き紛らはしたるも」といっている通りなのである。頭中将以外の人には分かってはいけないのだ。ただ源氏は、偶然にも、「雨夜の品定め」の頭中将の告白において得た、解読の鍵を持っていたのである。だからこそ「書き紛らはしたるも」といえたのである。

旧来の夕顔解釈の誤謬（と筆者は思う）は、一にかかって、この「心あてに……」の歌の誤解釈に

あったのであり、前述の二つの軸を無視した「絵そらごとの物語」的解釈をしていたものといえるであろう。夕顔の巻とて、他の巻々と同じように、それぞれ「生活」の中に生き死んでいった人々の物語であるはずである。

では次に、前述二軸の無視に起因すると思われる「心あてに……」に関する誤解釈を、前述部分と多少ダブル点もあるが、具体的に述べてみよう。この歌の正しい解釈が、「夕顔」にとっては最重要事項に属すると思うからである。

①従来の説では、夕顔の家の隣家（惟光宅）の前に立ちどまっている車の主を、女側で、源氏と推測して、この歌を差し出した、ということになっている。

②「そこはかとなく書き紛らはしたるも」を「心あてに……」の歌がパスワード的性格の歌であることを理解せず、歌意明瞭と考えるために、「筆跡を変えている」と解釈しなければならなくなっている。

筆跡を変えている、と判断するためには、次の二条件が必要であるのに、それについては、旧説は何も触れていない。

㋑差出人がだれであるか、受取人に分かっていなければならない。

㋺差出人の筆跡を、受取人は熟知していなければならない。

なおつけ加えれば、「筆跡を変えている」という解釈は、少くともこの物語における「書き紛らはす」という単語の語義の正確なる把握を怠り、解釈者として最も警戒すべき「独善」を犯していて、それに気づいていないか、或は触れることを避けているといってよい。

③夕顔の花の性格を旧説は全く無視している。この物語では、

㋑「あやしき垣根になむ咲きはべりける」（随身の言）
㋺「くちをしの花の契りや」（源氏の言）
㋩「枝も情なげなめる花を」（夕顔側の女童の言）

というように性格づけている。これは頭中将や源氏などの上層貴族との身分上の差のある女を表象する花として、作者が使用していることに、旧説は気づいていない、といわなければならない。また、この「心あてに……」の歌の中で、女は、自分を「あやしき」「情なげなめる」花で卑下しているという点にも気づいていない。つまり、この花は、抽象的観念的な存在ではなく、前述したような夕顔という女に密着した、きわめて生活的現実的表象として使用されているのである。

④この歌の「露」についても、旧説は、万葉以来の男性表象を無視し、和歌用語の具体性生活性に目を向けず、きわめて抽象的な解釈を行なっている。「白露」はそこを訪れた高貴なる男性（夕顔側から見たとき頭中将と推測。実は源氏）を表象するものであるはずである（この露には、筆者（黒須）は、漢文学における「露」の日本化が見られると思うが、拙稿『東方学第五十一輯「紫式部における露考」』を参照していただけたら幸である）。

露と草花との関係には、万葉以来次のようなものがあるのは、周知の事であろう。

露（男性）↔女郎花（女性）
露（男性）↔萩　（女性）

この露（男性）↔草花（女性）の関係は、この歌においても変わっていないのであり、ただ、女郎花・萩ではなく、夕顔という花なのである。女は、前述のごとく、この花で自ら卑下している

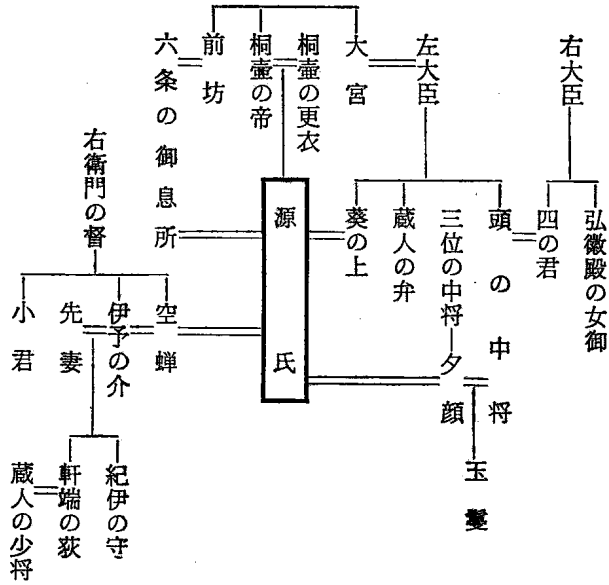
にすぎないのであって、この花が、高貴なる源氏を表象するなどという説には、到底首肯することはできない。「心あてにそれかとぞ見る、白露の光そへたる夕顔の花（ヲ）」と旧説は読んで、歌意分明の歌という解釈をしていたのであり、その点で、当事者（夕顔→頭中将）以外の一般の人として、このパスワードを読み解けないでいたのである、と筆者は考える。

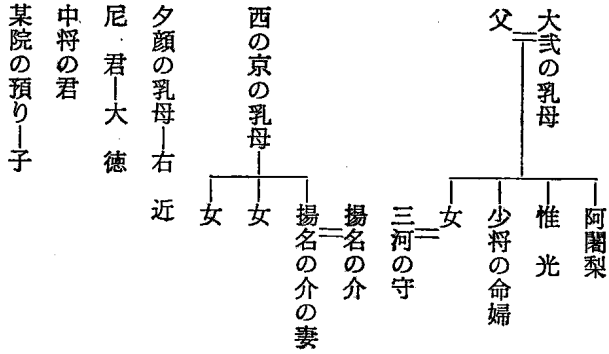
以上「心あてに……」の歌を材料にして、この「夕顔」の巻の一側面を述べてきたつもりであるが、小説中の人物は、身分の上下はあるにしても、あくまでも「生活者」であり、夕顔という女を考えるとき、頭中将という人を置きざりにしていては、この女の「生活」に触れることは不可能なのである。前述の二軸を前提として、もう一度「夕顔」の巻は読みかえされてよい。そのとき、夕顔・源氏はもとより諸登場人物の行動・心理も、興味深くわれわれの前に展開されるであろうし、当時の読者の味わったであろう感動も推測されるのである。

誤読の上で、いかに「夕顔論」を論じ合ったところで、致し方のないことであり、正しい「夕顔像」など出て来るはずもない。「夕顔」の正しい解釈は、後の玉鬘にも当然響いてくることであろう。また、筆者には、源氏物語全体に、いろいろの意味で再考させるものがあるように思われるのである。

このテキストによって、読者諸賢が、先入観にとらわれることなく、いわば明鏡止水に、正しい影を捉えて下さることを期待する。

（黒須重彦執筆）





此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

凡例

本書は大学・短期大学・高等学校の演習用ならびに講読用教科書として編纂した。

本書本文は「源氏物語大成」の底本（大島雅太郎氏蔵飛鳥井雅康筆）の本文に拠る。若干の誤脱とおぼしき部分は大成所収の青表紙系諸本によって改めたが、すべてその由を頭註に記しておいた。

本文には、教科書としての性質上、適宜段落を設け、仮名に漢字、あるいは漢字に仮名を宛て、仮名づかい・送り仮名を改め、句読点・濁点などを加えた。

頭註は簡略を旨としたが、特に本文の解釈に疑問がある箇所などについては、なるべくくわしく触れるようにした。

本書本文ならびに頭註は、松尾聰が作成したものであるが、頭註については黒須重彦の「夕顔という女」（笠間書院刊、昭49）および黒須の口頭の意見を参考にして、従来の通説を改めたところが多い。ただし参考のために、なるべく通説をも付記した。黒須の説の趣旨については、解説をよまれたい。

（追記）黒須説を支持する松尾の公表論文（文学 昭57・11）を、参考のために巻末に付載した。

夕

顔

(1)六条御息所（亡き前東宮妃）の邸であることが後文でわかる。
(2)源氏の乳母。後出の惟光の母。
(3)「たづぬ」は、さがし求めて行くこと。
(4)「おはす」はサ変動詞。主語は源氏（このとき数え年一七歳）。
(5)「せたまふ」は二重の尊敬語。
(6)檜のうす板を網代のようになめに組んだ垣。
(7)鄙は格子の裏に板を張ったもの。半蔀は、下半分を鱠板（はたいた）などで打ち、上半分だけを蔀として外側上方に釣り上げたり、押しあげたりするようにしたもの。
(8)柱と柱との間を一間（いっけん・ひとま）という。
(9)忍び歩きだから、網代車であろう。

六条わたりの御忍びありきのころ、うちよりまかでたまふ中宿に、(2)大弐のめのとのいたくわづらひて尼になりにける、とぶらはむとて五条なる家たづねておはしたり。(3)(4)

御車入るべき門は、さしたりければ、人して惟光召させて、待たせたまひけるほどむつかしげなる大路のさまを見わたしたまへるに、この家のかたはらに、檜垣といふもの新しうして、上は半蔀四五間ばかり上げわたして、すだれなどもいと白う涼しげなるに、をかしき額つきの透影、あまた見えてのぞく。立ちさまよふらむ下つ方思ひやるに、あながちに丈高き心地ぞする。いかなる者のつどへるならむと、様かはりておぼさる。御車もいたくやつしたまへり、さきも追はせたまはず、誰とか

知らむと、うちとけたまひて、すこしさしのぞきたまへれば、門は蔀のやうなる、押し上げたる、見入れのほどなく、ものはかなき住まひを、あはれに、いづこかさしてと思ほしなせば、玉の台も同じことなり。切懸だつものに、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉ひらけたる。

「遠方人にもの申す」

と、ひとりごちたまふを、御随身ついゐて、

「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ咲きはべりける」

と申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、このもかの

(1)古今、雑下、よみ人しらず「世の中はいづれかさしてわがならむ行きとまるをぞ宿とさだむる」
(2)板を横にややななめに重ねて柱に切りかけて作った板塀という。
(3)古今、雑体、旋頭歌「うち渡す遠方人に物申すわれそのそこに白く咲けるは何の花ぞも」
(4)夕顔という名の花の性格を随身のことばを通していっていることに注意。

も、あやしくうちよろぼひて、むねむねしからぬ軒のつまなどに這ひまつはれたるを、

「(1)くちをしの花の契(ちぎり)や。一房(ひとふさ)折りてまゐれ(2)」

とのたまへば、この押し上げたる門に入りて折る。

さすがにされたる遣戸口(やりど ぐち)に、黄なる生絹(すずし)の単袴(ひとへばかま)長く着なしたる童(わらは)の

をかしげなる、出で来てうち招く。白き扇のいたうこがしたるを、

「これに置きて参らせよ。枝も情なげなめる花を(3)」

とて、取らせたれば、門あけて惟光(これみつ)の朝臣(あそん)出で来たるして奉らす。

「鍵を置きまどはしはべりて、いと不便(ふびん)なるわざなりや。もののあやめ見たま(4)へ分くべき人もはべらぬわたりなれど、らうがはしき大路(おほぢ)に

(1)源氏の心をひいた美しい花が、「あやしき」ところに咲いているのを、源氏がこういったもの。この源氏のことばは夕顔という女性の運命を端的に言い当てている。

(2)主君として随身に謙譲を強いた言い方。

(3)さし出す側で、「情なげなめる花」といっていることに注意せよ(こうした夕顔の花を、高貴な源氏を表象するものとうけとることは困難であろう)。

(4)「たまへ」は謙譲の下二段活用の補助動詞連用形。見分けさせていただけるような者もおりませんが所ですけれど。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.